パレスチナ/イスラエル問題を多面的に理解するための——30冊

01 ｜『パレスチナを知るための60章』
臼杵陽・鈴木啓之編（明石書店，2016）
–
明石書店のお馴染みの「エリア・スタディーズ」の一つ。本書の特徴は，パレスチナ研究の大御所から若手までが大集合しているだけでなく，ジャーナリストやNGOスタッフ，他分野の専門家など，考えうる限り多数・多様な書き手が顔を揃え，それぞれが自分の領域と自負するテーマについて自由に筆を進めていることだ。パレスチナという切り口が照らす多様な世界が一書の中で乱反射する。
–

02 ｜『ぼくの村は壁で囲まれた——パレスチナに生きる子どもたち』
高橋真樹（現代書館，2017）
–
入門書として最適な一書。パレスチナ問題は宗教問題ではない，といったポイントがくっきりと示されるほか，「イスラエル市民はなぜ攻撃を支持するのか？」等，よく聞かれる疑問が提示され，それに正面から答えている。パレスチナの子どもや若者層に焦点を当ててはいるが，決して「子ども向け」ではなく，細部に足をとられて道に迷いがちな大人の読者にも頼もしい一冊だ。
–

03 ｜『14歳からのパレスチナ問題　これだけは知っておきたいパレスチナ・イスラエルの120年』
奈良本英佑（合同出版，2017）
–
「14歳からの～」とあるが，パレスチナ問題にすでに何らかの関心をもっていて，その歴史的背景について平易な言葉で学びたい・学び直したいと思う人にこそ勧めたい。16世紀のオスマン帝国のパレスチナ征服から，近年の「第3次インティファーダ」までの歴史が最小限の字数でスケッチがされており，熟練した歴史家だからこそ出来る仕事だと唸らされる。巻末資料も充実。
–

04 ｜『ヨーロッパの覇権とユダヤ人』
度会好一（法政大学出版局，2010）
–
ローマ帝国，中世イングランド，近世スペイン・ポルトガル，そして前期近代ヨーロッパ各地の「内なる異人」としてのユダヤ人の視点から歴史を複眼的に描く。とくに，支配権力に協力したユダヤ人，あるいは，ユダヤ人であることを隠すことで生き延びたユダヤ人「マラーノ」に着目することで，近代への複雑な道筋を示した。シオニズムを生み出したヨーロッパ世界の「ユダヤ人」の存在を学べる一冊。
–

05 ｜『ユダヤ人国家——ユダヤ人問題の現代的解決の試み』
テオドール・ヘルツル，佐藤康彦訳（法政大学出版局，1991）
–
近代シオニズム運動を代表する「シオニズムの父」のマニフェスト。原書は1886年に書かれた。もともとはむしろ同化ユダヤ人（ヨーロッパのキリスト教社会へ同化傾向のあるユダヤ人）であったヘルツルが，ヨーロッパで高まる反ユダヤ主義に直面して，同化主義からユダヤ民族主義への転換を宣言し，ユダヤ人国家へのプログラムを描いた。
–

06 ｜『ファシズム時代のシオニズム』
レニ・ブレンナー，芝健介訳（法政大学出版局，2001）
–
ナチスとシオニストのユダヤ人とのあいだに「利害の一致」さらには「協力関係」があったことを論証した書物。シオニズムが「民族主義」である点では，ドイツ民族主義としてのナチズムとは共通点があり，かつ，ヨーロッパの外部へとユダヤ人を「移送」したいという点では利害が一致したため，ナチスがユダヤ人を国外追放することをシオニストたちは歓迎し協力さえしたという。
–

07 ｜『ユダヤ人問題からパレスチナ問題へ』
池田有日子（法政大学出版局，2017）
–
第二次大戦中のヨーロッパにおけるユダヤ人大量虐殺のなかで，シオニズム運動の主要な舞台となったアメリカ。その国是である「民主主義」に齟齬をきたすはずの「ユダヤ人国家」建設運動は，いかなる経緯を経て正当性を獲得したのか。アメリカ・シオニスト運動指導部の権力闘争と，パレスチナにおけるシオニスト指導部との関係の変化を，実証的資料を駆使してあぶり出す。
–

08 ｜『エルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』（新装版）
ハンナ・アーレント，大久保和郎訳（みすず書房，2017）
–
イスラエルは，戦後逃亡していたナチスの幹部アイヒマンを海外で逮捕，公開裁判にかけアイヒマンの極悪非道性を訴えることで，国家存在を正当化しようとした。しかし傍聴したユダヤ人哲学者アーレント（ナチス時代にアメリカに亡命）は，アイヒマンが小さな官僚にすぎず，命令に忠実に従ったがために虐殺に加担したという逆説を喝破するとともに，シオニストとナチスの共犯関係を批判した。
–

09 ｜『七番目の百万人——イスラエル人とホロコースト』
トム・セゲフ，脇浜義明（ミネルヴァ書房，2013）
–
シオニズムにとっては「敗北」であったはずの，ナチス・ドイツによる600万人のヨーロッパ・ユダヤ人虐殺。戦後それは，「ユダヤ国家が存在していたらホロコーストはなかった」というイスラエル建国の口実とされ，さらに多様で雑多な「ユダヤ人」のあいだに共通の歴史意識と集団的アイデンティティを作り上げるため，イスラエル国家によって利用されてゆく。記憶の政治をめぐる必携の書。
–

10 ｜『ユダヤ人の起源』
シュロモー・サンド，高橋武智監訳（ちくま学芸文庫，2017）
–
イスラエルの歴史家である著者が「人種としてのユダヤ人は存在しない」と断言し物議をかもした書物。聖書に由来する古代ユダヤ人の離散の物語が考古学的には否定され，むしろ彼らはその地でキリスト教へ，イスラームへと改宗したいまのアラブ人であるという。逆に，ヨーロッパのシオニストたちの起源は，中世のユダヤ教への改宗にあるのであって，世界のユダヤ人の離散以前の血筋など存在しないという。
–

11 ｜『ディアスポラの力——ユダヤ文化の今日性をめぐる試論』
ジョナサン・ボヤーリン＆ダニエル・ボヤーリン，赤尾光春・早尾貴紀訳（平凡社，2008）
–
ユダヤ民族主義やイスラエル国家において，離散を意味する「ディアスポラ」は否定すべきものとされたが，実はユダヤ教は本来，神罰としてのディアスポラを思想的核心に置いたものであり，むしろ世俗政治によるイスラエル国家は反ユダヤ教ということになる。敬虔なユダヤ教徒である著者兄弟は，領土国家に代わる別の地盤として肯定的な「ディアスポラ主義」をユダヤ教思想から提唱する。
–

12 ｜『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』
臼杵陽監修，赤尾光春・早尾貴紀編（人文書院，2011）
–
紛争の起源としてのシオニズムを多面的に解剖する論集。大英帝国やロシア帝国の衰退とユダヤ民族主義の興隆，ホロコーストとイスラエル建国の関係，パレスチナの「ナクバ＝大破局」とイスラエルの「原罪」，聖地への「入植」の思想と行動，映画や音楽の文化産業と（反）シオニズム，現代哲学思想と（反）シオニズム，の各テーマでその分野の複数の専門家が論じる。
–

13 ｜『私のなかの「ユダヤ人」（増補新版）』
ルティ・ジョスコヴィッツ（現代企画新社，2007）
–
ナチスから逃れるためポーランドを離れた両親のもと建国直後のイスラエルに生まれ，来日40数年にもなるユダヤ人女性が，その両親の来歴から反シオニストとなっていく自分の思想形成，そして来日後の日本国籍取得の拒否事件を振り返りつつ，「国家」や「民族」を自らの経験から考察する。1982年に初版が刊行されてから，89年，2007年と，増補を繰り返して読み継がれてきた名著。
–

14 ｜『イラン・パペ，パレスチナを語る——「民族浄化」から「橋渡しのナラティヴ」へ』
イラン・パペ，ミーダーン編訳（つげ書房新社，2008）
–
パペの来日講演と質疑応答の全記録。『パレスチナの民族浄化』の概要から，イスラエル国内の歴史認識論争，パレスチナ側の歴史家との対話，他の人文科学分野との関わりまで，幅広い議論を明晰に語り，数多くの質問のすべてに真摯に答えている。パペの歴史学の営みが，深い哲学的認識と広い政治的実践に裏打ちされていることが分かる。

15 ｜『国境にて——イスラエル/パレスチナの共生を求めて』
ミシェル・ワルシャウスキー（つげ書房新社，2014）
–
活動家ワルシャウスキーは，1960年代にイスラエルの反シオニズム社会主義グループ「マツペン」に所属し，その後も80年代にオルタナティヴ情報センターというNGOを設立，イスラエル側・ヨルダン川西岸地区の両方で，二民族の共生を求めてデモや講演や出版の活動を継続してきた。本書はその半生をさまざまな「境界線」に重ねて振り返る。それは，国境や，人を隔てる分断線，先へ広がる最前線など多義的である。
–

16 ｜『鉄の壁——イスラエルとアラブ世界（上・下）』
アヴィ・シュライム，神尾賢二訳（緑風出版，2013）
–
シュライム（イラク生まれでイスラエルへ，さらにイギリスへ移民）は，イラン・パペとともに「ポスト・シオニスト」と呼ばれる歴史家の一人であり，シオニスト側の公文書とオーラルヒストリーによって，従来のアラブ側にすべての非をおしつけてきた政治神話を覆し，イスラエルの独善性を解明した。本書では1947年の建国期から2006年の第二次インティファーダ以後まで広範にカバーしている。
–

17 ｜『ユダヤとイスラエルのあいだ——民族/国民のアポリア』
早尾貴紀（青土社，2008）
–
第一部でマルティン・ブーバーとハンナ・アーレントを中心にユダヤ人知識人によるアラブ人との共存国家を目指す「バイナショナリズム」の理想と限界を描く。第二部でアイザイア・バーリン，マイケル・ウォルツァー，ジュディス・バトラーといったリベラルなユダヤ人知識人によるイスラエルの占領政策批判が，なおもシオニズム的視点で限界をもつことを示す。
–

18 ｜『ホロコーストからガザへ——パレスチナの政治経済学』
サラ・ロイ，岡真理・小田切拓・早尾貴紀編訳（青土社，2009）
–
占領がパレスチナ社会に与える影響に関する政治経済的研究で世界的に知られるサラ・ロイ氏の，来日時の講演および徐京植氏との公開対談の記録。イスラエルの占領政策を，開発を根本的に阻害する「反開発」概念から分析しつつ，ガザでの印象的な光景を提示して占領の意味を視覚的に伝える。その静かな語り口は，ホロコースト生存者2世としての自らの立ち位置を語るさいにも揺らがない。
–

19 ｜『パレスチナから報告します』
アミラ・ハス，くぼたのぞみ訳（筑摩書房，2015）
–
イスラエルの主要日刊紙の記者のなかで，唯一のパレスチナ占領地への特派員として活躍するアミラ・ハス。本書には「オスロ和平プロセス」が行き詰まりを見せた1997年から，2002年までに彼女が書いた記事から主要なものが収録されている。データを駆使した緻密で客観的な文体で占領の諸相を伝えるとともに，モラルの破壊されたイスラエル軍の姿をあぶり出す。
–

20 ｜『〈不在者〉たちのイスラエル——占領文化とパレスチナ』
田浪亜央江（インパクト出版会，2008）
–
イスラエル国家の20パーセントを占めるイスラエル国籍をもつパレスチナ人。マイノリティとして一括りにされる彼らのもつ多様性，文化的差異は，研究者として現地に滞在した筆者を圧倒する。アラブ系・ロシア系ユダヤ人も含め，公的なイスラエル表象からこぼれ落ちた〈不在者〉の視点から浮かび上がるのは，その建設と維持のために人々を翻弄してきた国家の力と安っぽさだった。
–

21 ｜『パレスチナ人は苦しみ続ける――なぜ国連は解決できないのか』
高橋宗留（現代人文社，2015）
–
2009年3月，イスラエルのガザ攻撃直後に国連人権高等弁務官事務所パレスチナ事務所副代表として現地入りし，同事務所の人権侵害実態の調査・報告業務を立ち上げた筆者。早々に目にした「心を木っ端微塵に」される人権侵害の実態。さらに国連によるパレスチナ援助が，イスラエルの占領政策を請け負うメカニズム。国連の業務の内実を知る立場からの，これまでになかったタイプの書である。
–

22 ｜『〈鏡〉としてのパレスチナ――ナクバから同時代を問う』
ミーダーン編（現代企画室，2010）
–
パレスチナや中東情勢に関するセミナーやイベントを行ってきた市民団体による，ナクバ60年に当たる2008年から翌年にかけて開催された連続セミナーの記録。南アフリカとの比較やアラファート指導体制の総括など，パレスチナ問題の一般書では扱われにくい論争的なテーマが選ばれている。パレスチナ研究者と他分野の専門家が議論を交差させ，時に大胆な踏み込みも見せる刺激的な一書。
–

23 ｜『ガザの空の下――それでも明日は来るし人は生きる』
藤原亮司（dZERO，2016）
–
紛争地取材をするジャーナリストのルポルタージュだが，序章と真ん中の章に大阪の在日朝鮮人の街での体験が描かれているのが，類書とは異なる。パレスチナ/イスラエルを取材し続ける著者が「（異）民族」と出会った原体験であり，また取材から立ち戻る原点でもある。取材時期は第二次インティファーダの2002年から何度目かの大規模なガザ攻撃があった2014年まで，そこにある「人びとの日常」を描く。
–

24 ｜『それでもパレスチナに木を植える』
高橋美香（未来社，2016）
–
入植地と分離壁は増大し続け，不当逮捕や家屋破壊がエスカレートするばかりの2011－2014年のパレスチナ。家族や友人としてパレスチナ人の懐に飛び込み，時には「自由な外国人オンナ」として嫉妬され喧嘩をしつつ互いに成長してゆく。そうした姿勢のなかでこそ，通り一遍の取材では捉えられない「占領下の苦しみ」のありようが記録され，「希望」をあきらめない強さが培われたのだろう。
–

25 ｜『それでも，私は憎まない――あるガザの医師が払った平和への代償』
イゼルディン・アブエライシュ，高月園子訳（亜紀書房，2014）
–
ガザのジャバリア難民キャンプで生まれ育った著者は，幾多の困難を乗り越え国外で産婦人科医としてのキャリアを築き，ガザに戻る。驚異的な忍耐力と信念に支えられ，パレスチナとイスラエルの和解への希望を持ち続ける姿勢は，2009年1月，イスラエルのガザ攻撃により3人の娘を一瞬のうちに失っても変わらない。一人の人物の姿の中に，彼を生んだパレスチナ社会の強さと意志が見えてくる。
–

26 ｜『パレスチナに生まれて』
ナージー・アル・アリー，露木美奈子訳（いそっぷ社，2010）
–
パレスチナ人の難民キャンプの壁面などによく描かれている後ろ向きの坊主頭の子ども。パレスチナ人政治風刺漫画家ナージー・アル＝アリーの生み出した有名なキャラクター，ハンダラだ。パレスチナを取り巻く国際情勢や大国の指導者たちの欺瞞的な姿を静かに眺め，辛辣に皮肉る。ハンダラ漫画の英語版アンソロジーから訳出された本書は，パレスチナの政治文化を理解する上でも必携だ。
–

27 ｜『ハイファに戻って/太陽の男たち』
ガッサーン・カナファーニー，黒田寿郎・奴田原睦明訳（河出文庫，2017）
–
ハイファを舞台に，パレスチナの民族浄化がパレスチナ人とイスラエル人の二家庭にもたらした悲劇を通し，「ワタン（祖国）」の意味を問う「ハイファに戻って」。灼熱の湾岸に出稼ぎに向かうパレスチナ人を襲う不条理を描いた「太陽の男たち」。現代パレスチナを代表する作家カナファーニーの手による本2作は，いまや現代世界文学を語るさいに当然読まれているべき古典となっている。
–

28 ｜『悲楽観屋サイードの失踪にまつわる奇妙な出来事』
エミール・ハビービー，山本薫訳（作品社，2006）
–
1948年，パレスチナからイスラエル領内の都市へと変貌した故郷ハイファに残り，イスラエル共産党の国会議員となりながら健筆をふるったエミール・ハビービー。イスラエルの潜在的な敵として疑惑の目を向けられつつ，服従と抵抗のはざまで生きる同胞の悲劇的で滑稽な姿を，彼は「悲楽観屋サイード」という矛盾に満ちた人物として描いた。彼もパレスチナ人の永遠のアイコンの一つである。
–

29 ｜『シャティーラの四時間』
ジャン・ジュネ，鵜飼哲・梅木達郎訳（インスクリプト，2010）
–
フランスの「根無し草」作家ジュネが，1982年にレバノン・ベイルート郊外のシャティーラ・パレスチナ難民キャンプで起きた大虐殺（イスラエル軍の協力のもとレバノン人民兵が行なった）の直後に血みどろのキャンプ内に入った際のルポルタージュ。1970年代に交流していたパレスチナ解放運動の回想を重ねつつ，1986年のジュネの遺作となった大著『恋する虜』（日本語訳は人文書院）へとつながっていく重要な文章。
–

30 ｜『エルサレム――記憶の戦場』
アモス・エロン，村田靖子訳（法政大学出版局，1998）
–
イスラエルのリベラル左派のユダヤ人歴史家・ジャーナリストが，詩的に描く古代から現在までいたるエルサレムの歴史。さまざまな緊張や矛盾をはらむ，すなわち「民族の記憶」が対立するこの都市の歴史を，考古学・神話学・政治学・地理学・文学・宗教学にわたって描き出している。たんなる情勢分析による無味乾燥な解説書とは一線を画した深みのある語りで知られる一書である。

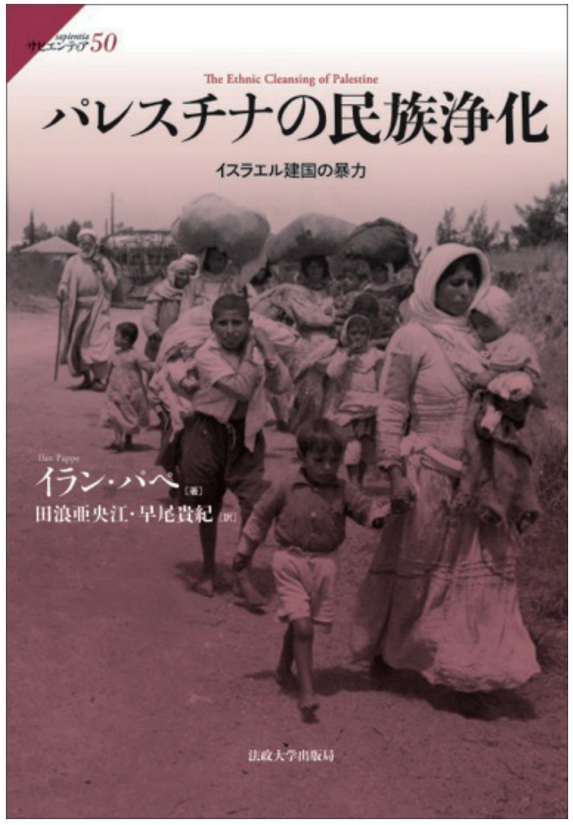
一般財団法人
法政大学出版局
Hosei University Press
--
〒102-0073東京都千代田区九段北3-2-3
3-2-3 Kudankita, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-0073, Japan
--
Tel. 03-5214-5540 ｜ Fax. 03-5214-5542
Mail.sales@h-up.com
http://www.h-up.com/

田浪亜央江・早尾貴紀 ｜ 選書＆解説リーフレット

イラン・パペ［著］
Ilan Pappé

パレスチナの民族浄化
The Echenic Cleaning of Palestina

刊行記念ブックフェア
法政大学出版局



パレスチナ/イスラエル問題を多面的に理解する入口として

今年2018年は，イスラエルが1948年に建国されてから70年になります。それは同時に，「パレスチナ」の決定的な破壊から70年目でもあります。ここで「パレスチナ」というのは，現在のイスラエル領も含んだ「歴史的パレスチナ」全体のことです。聖地エルサレムを含むこの地では，聖典や預言者を共有するユダヤ教，キリスト教，イスラームを信仰する多様な人々が共存してきました。

しかし現在，パレスチナの大半は「ユダヤ人国家イスラエル」となっているばかりか，残りの地域もイスラエルが占領し，住民を軍事支配下においています。1947年の国連パレスチナ分割決議から48年のイスラエル建国宣言，それによって始まった第一次中東戦争期に焦点をあて，パレスチナの姿がこのように激変した経緯を実証的に綿密に分析したのが，イスラエルの歴史家イラン・パペの『パレスチナの民族浄化』です。

それまでパレスチナ/イスラエル問題は，キリスト教とイスラームの宗教紛争だとか，アラブ人とユダヤ人のあいだの民族紛争であると誤解されたり，あるいは世界中で迫害されてきた流浪のユダヤ人が「約束の地」に帰還して開拓した，といった物語でイスラエル建国が正当化されたりしてきました。これは先住アラブ・パレスチナ人の共同体の歴史や文化が破壊され，それが隠蔽されてきたからこそ成り立っている暴論です。パレスチナ人にしてみれば，イスラエル建国は「ナクバ（大破局）」にほかなりませんが，強国となったイスラエルとそれを支持する欧米世界によってその証言はかき消されてきました。

イラン・パペは，当のイスラエルに住むユダヤ人の歴史家として，そうした言論状況に対し，稀有な，そして鮮烈な介入を行いました。パペが論証したのは，イスラエル建国が，政治力と軍事力でユダヤ人国家建設を目指すシオニストによる計画的かつ組織的なパレスチナ人の排除＝「民族浄化」によって実現されたものであるということでした。シオニスト側の公文書の渉猟と，オーラルヒストリーを含むパレスチナ側の歴史家の成果の活用によって，パレスチナの村や町がどのように破壊され人々が故郷を失ったのかを緻密に一つひとつ示しました。イスラエルのユダヤ人の歴史家が堂々とこの仕事をやり遂げたことへの衝撃は，イスラエルにとどまらず，広くアラブ世界にも及びました。

2017年12月6日，トランプ大統領がエルサレムをイスラエルの首都と認定し，米国大使館をエルサレムに移転する表明をしたことで，パレスチナ/イスラエル情勢はまたもや緊迫を迎えています。この問題の起源も本書で扱われている民族浄化にほかならず，パレスチナ分割決議のなかではいずれの領土にも属さず国際管理下に置くとされていたエルサレムの西側を，ユダヤ軍が強引に武力で占領し，イスラエル領としたことが発端でした。

「1948年」という年とその前後にはまた，南北朝鮮が分断されたかたちで「独立」し，二つの「中国」が正統性の争いを始め，インド・パキスタンが分離独立し，さらに南アフリカ共和国にアパルトヘイト体制が確立し，ドイツでベルリン封鎖が起きました。パレスチナを視点とすることで，第二次大戦終結後の世界のあり方が決定的となって以降の「70年」として現在を捉えなおすことが出来るかと思います。

このブックフェアでは，本書以外にパレスチナ/イスラエル問題を多面的に理解するのに有益な書籍を30冊選びました。アラブ・パレスチナ側，ユダヤ・イスラエル側といった区別を設けず，歴史・政治・文学など幅広い分野で，刊行年の新しい入手可能なものを中心に選びました。この30冊以外にも古典や名著も多々ありますが，まずはこのリストが入り口として役立てられたらと思います。

訳者：田浪亜央江・早尾貴紀